

教育講演①

「『治す場』から『治る場』へ 病気学から健康学へ」

慶応義塾大学大学院

システムデザイン・マネジメント研究科 特任教授

稲葉 俊郎

西洋医学は病気学を中心とした学問であり、医療従事者は病気に詳しくても、「医者の不養生」と言われるように「健康」のことは疎いものです。病気学を扱う西洋医学に対して、健康学を担っているのは伝統医学の領域であり、その他に文化や芸術もわたしたちの健康を担っています。病気を扱う場だけではなく、訪れる方が健康や幸福になれる場を創造していく必要があります。個人と場（集団や組織）はそれぞれの利害が衝突するため、両立させることはもともと困難です。ただ、人間は個と場とを両立させることができる稀有な生き物です。そうした個と場をつなぐのは「対話の力」です。創造的な対話に重要な前提は「安全な場」であり、誰もが対等に出会えることです。わたしたちは場の力に無意識に影響されているため、場の力を活用することは、人間の自然治癒力にも影響します。コロナ禍で場が解体される中で、逆説的に「場の力」を感じたのが現代だと思います。

特に、わたしは芸術と医療とが補い合える場を模索してきました。山形ビエンナーレという芸術祭では芸術監督を拝命し、医療と芸術の接点をあらゆる方向から模索しました。山形ビエンナーレ2024では蔵王温泉という1900年の歴史ある湯治場の力を借りながら、温泉、芸術、医療が混じり合う場を創造しました。「病気学」の視点で「治す」ことだけに注力せず、「健康学」の視点で「治る」場を考えることが必要です。これからは「治す場」から「治る場」へ、そして病気学から健康学へという場のシフトが起きて行くことを考えています。湯が湧き出る温泉地や湧水地は古来から信仰の対象であり、そうした新しい場づくりの挑戦もご紹介します。